

interview インタビュー

女性スポーツキャスターの草分け的存在として活躍し、現在はスポーツノンフィクション作家等多彩な顔を持っている。もともとは演劇専攻であった長田さんが、いかにしてスポーツライター・ノンフィクション作家となったのか、インタビューした。

(聞き手：秋田 徹)

プロフィール おさだ・なぎさ

東京都生まれ。桐朋学園大学演劇専攻科卒業。ノンフィクション作家。海外リポーターを経てスポーツライター、キャスターとして活躍。著書に『こんな凄い奴がいた』（ベースボール・マガジン社、文春文庫）のほか、『北島康介』プロジェクト（文藝春秋）、『いつ産むか』などがある。日本スポーツ学会代表理事。

ノンフィクション作家

長田 渚左 さん

——演劇専攻でいらしたのに、現在はスポーツライター、ノンフィクション作家ということですが、どういうことでそうなられたのですか。

17歳のときに水上勉原作の『飢餓海峡』というお芝居を観て、これはとてつもない芝居だと…。初めて自分でお金を払って買ったキップで観たお芝居で射ぬかれました。その主役だった女優の太地喜和子さんをその時点で抜こうと思ってしまったんですよ！（笑）

大学で役者になろうと思っていた時期、とことん4年間やりまして、4年生のときに、年間13本芝居をやって、全部主役でした。ですが、私ひとりが役者に向かない！ということを手確信しまして、女優をあきらめました。

ただし、演劇科にいたことで、私は人がすごく好きだなと、人間にまつわる仕事がしたいなあと。4年間でこの2つだけは分かったんですね。

——スポーツライターになられたキッカケは何ですか。

最初はレポーターの仕事をしていたんですよ。だから、へき地にも行きましたし、競馬の仕事もさんざんしました。それで段々淘汰されていって、スポーツの中の人間を伝えたいなと思うようになっていったのだと思います。

——スポーツあるいはスポーツをしている方と接触してきて、どういうものが得られますか。

スポーツの中で自己表現をしている人なんですよ。人生が凝縮されている、燃焼度が普通の人の4倍…。そこにはもちろん勝利して、成功ということがあるんですが、常に失敗があからさまになりますから、人間がおのずと滲み出る世界ですね！

——去年『北島康介』プロジェクト』『スポーツで育てる』『こんな凄い奴がいた』を出版されていますよね。『北島康介』プロジェクト』を書かれるキッカケは何だったのですか。



取材というものは、居合い抜きのような仕事を、居合い抜きのような仕事を費やして、想像してゆけるか。話を聞く前に、相手の極意のことを。

それは、北島選手の眼だったと思います。かなりのスポーツ選手を見てきて、あの人の眼を見たときに頂点まで上りつめる眼だと思いましたので、逃してはならないと…。猛禽類の眼でしたので…。

——『スポーツで育てる』というのはまたユニークな著作だと思うんですが、親子の関係、特に父と娘に着目したというのは何か理由があるのですか。

最近、女性のスポーツ選手の活躍が目立ちますが、一般的にはお父さんと娘というのはなかなか特殊な関係かなと思うんです。私自身は17歳のときに父を亡くしてしまっていて、もっと父と話をしたいなあと考えたときにいなかった。何か、その関係も完結してみたいというのはありました。3組の父と娘から相当違うお答えをいただいたのが、すごく面白かったです。

——『こんな凄い奴がいた』は素晴らしい本ですよ！

オリンピックで日本人初の金メダルを獲得した三段跳びの織田幹雄、フィギュアスケートの伊藤みどりら38人のスポーツ界のエリート選手たちの本人も知らなかった新事実に迫るノンフィクションです。

これで、やめようと思ったんですよ！ 出張費を含め、相当きつい。時間も5年くらいやっていて。決定打として、スポーツものはやめよう！とっていました。ほとんど宣伝もしていただかなかったので、あまり売れなかったんですよ！ でも、もしそこで、気持ちよく世の中に出て、売っていたら他の本は出なかったんですが、文庫化して注目されました。

——現在、取り組んでいらっしゃるの、どういうことですか。

今、ケガの問題をやっているんです。大きなケガは選手生命の死ですから、そのあと、その人はどうなっていたのか？話を聞く。ケガとか病気とか絶望的な状況に追い込まれることがスポーツ選手って多いので、そのあと、その人の心持ちを含め、普通の人でも元気が出てくるなあと思うことがたくさんあると思っています。

——人を取材する極意のようなものはありますか。

あればいいですよ！(笑) 取材というのは、居合い抜きのような仕事だと思います。いわゆるセオリーやノウハウはあてにならない。ただ、聞きに行く前にどれだけ時間を割けるか？ということとも言えると思います。相手が言うことで、外してくることがあるんですよ、それはそうじゃないんじゃないか？とか。相手のことを自分の時間を費やして、想像してゆけるか？人の心への魔法の言葉はないんですよ！

——弁護士の仕事に対するイメージは？

日本ペンクラブで、一緒だった弁護士さんは、すごく厳しいことをおっしゃるんだけど、表現力がある方でした。弁護士さんはとことん1冊のものを読みこなして血肉にした方でしょうが、相談に行きたいという気持ちにさせるものを持っていることが大切ですよ。その方の温かさのようなものが随分と作用する仕事なのではないかと思えますね！

身体が故障するとお医者さんに行きますけど、心にいろいろ問題があるときに、弁護士さんのところに行くわけで、病んだ人ばかりを相手にする仕事ですよ？ 結局、人間的な魅力に引き付けられて扉をたたくことも多い。

その人に会うと、自分の頭の中が整理される。相談に来た方の良い部分、純な部分を確認できたりする方って、素晴らしいなあって思います。仕事の醍醐味としては、加害者にも被害者にも逢えるというのがあると思うんですよ！ 両方の言い分みたいところは、人間的に濃いと思えますね！

(構成：秋田 徹)